

初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館 NO.4 (2016年10月1日号)

暑かった夏も、夕刻になるとツクツクハウシ・ヒグラシの合唱から日々大きくなる虫の声に、秋の訪れが実感できるようになりました。地球上の、思いもかけない自然の脅威にさらされ、日本でも今夏の東北や北海道の台風被害などは地震以上に今までにない体験でした。ことあるたびに万葉故地や万葉愛好家の皆さまの様子が気にかかります。みなさまつつがなくお過ごしでありますように…。

さて、犬養万葉記念館も明日香村へ来られる方だけではなく、少しずつ村民の方々の利用も増えてきました。犬養孝先生だけの展示に限らず、以前坪庭であったところをリニューアルして建て増した小部屋は、「飛鳥の匠」コーナーとして、明日香村の方々の作品を随時展示しております。つばいちホールはコンサートホールとしても奈良県主催のミュージックフェストの会場に選んで頂いたり企画コンサートのレンタルも増えました。また、手狭ながらも館庭で万葉植物を楽しんでいたごとうと育てた(万葉集中、1首しか登場しない)アザサやまゆうも開花し、記念館らしい特徴が出てきたことをうれしく思っております。9月24日にいよいよキトラ古墳の施設もオープンし、壁画展示も始まりました。ますます魅力的な明日香村へ何度でもお訪ね頂きたいものです。



▲8月末の「光の廻廊」に記念館も参加

犬養先生の碑



稲淵にある明日香川の飛び石の周辺を今年もひがなばなが彩りを添えてくれています。明日香川を明日も渡ろう!…とこの橋を渡るたびに恋人への愛を確信していたのでしょう。

⑩8 明日香川 明日も渡らむ
石橋の 遠き心は
思ほえぬかも (巻11-2701)

記念館歳時記



「第49回万葉の明日香路に月を観る会」
中秋の名月の9月15日には「月を聴く」ピアノコンサートが催されました。釜崎禎さんと丸山亜希子さんに「月光の曲」や「月の光」などの名曲を演奏していただきました。そして参加者全員で万葉歌月光抄を朗唱し、移動した石舞台古墳公園で月を仰ぎました。思いが通じたのか、曇り空の雲の切れ間から月が見えたのです。



ミニミニ万葉植物園!
白壁沿いの山吹をはじめ、初夏にはフラワーポットの「あざさ」、7月には記念館ポスト横の人麻呂コーナーと名付けた「浜木綿」、そして鉢植えですが、秋の七草も種類が増え「万葉植物」をより具体的にご紹介できるようになりました。

これからの予定

- 11月 1日(火)~30日(水) 犬養孝交流展(於/生駒ふるさとミュージアム)
- 11月13日(日) 万葉植物野外講座 馬場吉久氏
- 12月 4日(日) 『記・紀・万葉』朗唱フェスティバル(於/明日香村公民館)
- 12月18日(日) チコンキ・カフェ(冬の調べ)
- 1月(未定) 万葉古代衣装展示会(冠位12階)
- 2月(未定) 万葉かるた会

※広報あすかで毎月お知らせをしています。
詳細は、ホームページでご確認いただくか、
直接お問い合わせください。



前回に引き続いて、昭和天皇の飛鳥甘樫丘行幸(昭和54(1979)年12月4日)に関わるエピソードを紹介しよう。

この行幸について、「わたしは、御苦勞の多かった天皇陛下の御一生に、またとない歓喜の時を、お作り申し上げることの出来たのは、忘れられない思い出である。」「(「風のように やすらかに」『偉大なる昭和天皇』UCC上島珈琲、1998年)と、犬養先生は記している。

マスコミの一部はこれを「昭和の国見」と喧伝したが、統治者が国土を望み見る古代の農耕儀礼を、国民主権のこんにち、安易に用いることに危惧され、どのように表現したらよいものかと、私は先生から相談を受けた。そして、「これは予祝行事とはちがうから、正しいえば“昭和の国見”というわけではない。なつかしいふるさとの故地に立たれて、風土にいそづく古代の心を感じるであろう。」「(「甘樫丘の記—丘の上の天皇」、『万葉十二ヶ月』新潮社、1983年)と記した。

昭和55(1980)年元日の御製の、

甘樫丘にて 犬養孝古歌を朗詠す

丘に立ち 歌をききつつ

遠つおやの しろしめしたる 世をしのびぬ

は、題詞に「犬養孝」の氏名が記されていたので、先生は恐懼した。この御製は将来公表してもよいと判断されたためであろうか、新年早々、陛下のお気持ちとして侍従長から先生に電話で伝えられた。先生は記憶してメモ書きしたため、前掲の随想に、

丘に立ち 歌を聞きつつ

遠つ祖(おや)の 知ろしめしたる 御代しのびぬ

と紹介してしまった。「御世し」は「世をし」の誤記であることは、前掲書が文庫になった後に判明した。先生にとって大王(天皇)の治世は、「御代」との意識であったからであろうか。当時、誰も御製を直接確かめることはできなかったのも、誤記を孫引きする人が現れた。

昭和天皇は生涯1万首ほどの歌を詠まれたといわれているが、そのうち公開されているものは1割にも満たない。崩御の後には、宮内庁侍従職[編]『おほなばら-昭和天皇御製集-』(読売新聞社、1990年)、宮内庁[編]『昭和天皇御製集』(講談社、1991年)として編纂された。拙稿の御製の表記は、これらに基づいている。

昭和54年12月4日の『入江相政日記 第五巻』(朝日新聞社、1991年)の記事は、前回に紹介した。もう1つの1次史料である『昭和天皇最後の側近 卜部亮吾侍従日記 第一巻』(朝日新聞社、2007年)は抄録編集のため、卜部侍従が奈良から帰京する「12月6日(木曜)〈奈良〉」の記事は収録されているが、残念ながら3日・4日・5日の記事は収録されていない。「卜部日記」にも飛鳥行幸の記事が書かれていると思われる。

両陛下は3日に正倉院に行幸啓して5日に帰京。卜部侍従は6日に正倉院に再度行き、北・中・南倉の仮封を解いて巡回したのち、勅封紙・侍従封紙・墨つけの順で閉封し、次いで西宝庫1階に降りて同じ手順で閉封している。

次の御製は、この時の思い出を詠ったものである。

奈良県の旅行 正倉院

遠つおやの いつき給へる

かずかずの 正倉院の たからを見たり

さて、この年の遡ること1月12日、歌会始の召人となった先生は、皇居から帰途する自動車の中で、同行の書陵部の橋本不美男氏から浩宮殿下(現、皇太子)の詠まれた歌を手渡された(「召人の記—歌会始」『万葉十二ヶ月』)。

甘樫の 丘の上に聞く 師のみ声 遠き昔を 思ひめぐらす

前年春に学習院高等科の生徒だった浩宮殿下は、甘樫丘で先生の説明を聴かれた。日付は先生から聞きそびれたが、後日、先生が東宮御所に招かれた折、皇太子・皇太子妃殿下(現、今上天皇・皇后)は、「浩宮の師」としての敬意をもって部屋の外の廊下に立ち、先生を出迎えられた。部屋の中に入って拝謁する作法ではなかった。わずかな時間ながら飛鳥万葉の話をお聞かせしたと、その時の模様を私に語った。皇室にとって、飛鳥の地は遠つ祖に思いを馳せる特別な歴史舞台である。

昭和天皇にとって、二度と立つことかなわぬ甘樫丘の“国見”は、和田池で養魚を啄ばもうとしたユリカモメの話をお聞かせしたことによって、より強い思い出となったのであろう。

原武史氏は次のように語っている。「昭和天皇は、歴代天皇で初めて、皇居内の水田で自ら田植えや稲刈りを行い、自ら刈った新米を新嘗祭に神に供えた天皇です。つまり、新嘗祭に対する彼のこだわりと、いわば生きとし生けるものへの関心は根底でつながっていて、それはたぶん両輪だったのだと思う。昭和天皇の生物学への傾倒を、単なる趣味や政治からの距離の問題に置くのではなく、もっと考えてみる必要があるのではないだろうか。」「(半藤一利・御厨貴・原武史『卜部日記・富田メモで読む 人間・昭和天皇』朝日新聞社、2008年)。

ユリカモメから難を逃れた養魚、そして空砲で驚きながらも無事に飛び逃げたユリカモメ。天皇は安堵した。犬養先生の「追っ払(ばら)っちゃったんでございます」という諧謔講話によってお気持ちはさらになごみ、ふだん人前で見せることはない笑顔の人間天皇となられたのである。

【追記】

『昭和天皇最後の側近 卜部亮吾侍従日記』には、犬養先生にかかわる記事が1件だけ登場する。「昭和63年7月18日(月曜)・・・NHK山本記者から「万葉の人々」届く、・・・」(『第三巻』2007年)という記事である。先生は昭和天皇の御病状を心配し、お見舞いの気持ちをこめて「万葉の人びと」(NHK)を献上した。「お聴きになることはもはや適わないかもしれないが、NHKに頼んだよ。」と、呟かれるように私に語ったことを覚えている。これは昭和48(1973)年7月21日から8月31日にかけて、NHKで放送された15分ラジオ番組37回分の録音である。のち平成15(2003)年から18年にかけて年1巻ずつ、NHKサービスセンターからCD全4巻として編集刊行された。文字におこしたものは先に『万葉の人びと』(PHP研究所、1978年。新潮文庫、1981年)として出版された。天皇はビデオや書籍を御覧になることはできないと判断し、せめて音声ならばと思い、献上したのである。

昭和54(1979)年12月4日、香淳皇后が奈良ホテルで聴かれたカセット=テープ『万葉の心』(テイチク、1971年)も、先生が両陛下に献上したものである。この時テイチクはすぐにダンボール箱につめて宮内庁に郵送しようとしたため、先生は慌ててストップをかけ、宮内庁に献上の作法を問い合わせた。『万葉の心』は桐の箱に入れて、テイチクの社員が宮内庁に持参した。『万葉の人びと』も同様の作法手順によった。

編集後記

★ 第14回万葉の歌音楽祭が終了し、今年の大賞は小学生が受賞しました。岡本館長の明日香小学校の「かるた講座」をはじめ、『万葉集』が老若男女に愛される「魅力ある歌集」としての発信に力が入ります。

発行者：南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館

〒634-0111 奈良県高市郡明日香村岡1150 tel:0744-54-9300 fax:0744-54-4200

Eメール: info@inukai.nara.jp ウェブサイト: http://inukai.nara.jp

発行責任者：岡本三千代(館長)